ルポライター
滝川 康治

〝農と食〟北の大地から

連載第 189 回

足寄発・放牧酪農とアニマルウェルフェア

――「ありがとう牧場」の吉川さんに聴く（後編）――

草食性の牛を豚化してきた酪農「放牧の牛乳を飲みたい」と声を

華やかに見える大規模化の陰で多くの牛たちが病気や事故で死んでいく現実。穀物を多給して草食の牛を豚化させる品種改良（改変）のあり方……。「ありがとう牧場」を営む吉川友二さんは、こうした酪農業界の実態に疑問を投げかけ、ストックマンシップ（家畜に接する人としての規範や心構え）に沿った経営をめざしてきた。それは、アニマルウェルフェア（家畜福祉）に適った酪農の実践でもあった。新規就農から約20年の歩みをベースに、放牧酪農のプロフェッショナルを育てる学校を創り、一軒でも多くの農家が放牧で牛を飼うようにしていく夢も広げる。生産現場の実態をよく知り、放牧酪農を応援していくにはどうすればいいのか――。インタビューの後編では、そのあたりをじっくり聴いた。

（7月23日収録）

華やかそうな大規模化の陰で積み重なっていく乳牛の死体

――コンクリート・メタボ・ストレスの3点セットで乳牛のアニマルウェルフェアが損なわれ、産次数が少なくなっている現状について、もう少し詳しく紹介してください。

吉川　先日、これまで舎飼いをしていた酪農家が集まって農業生産法人をつくり、フリーストール牛舎で400頭ほど搾乳する大規模な農場を見学する機会がありました。完成したばかりのきれいな牛舎で粛々と糞を掻き出すスクレーパーが動くのを見て、「すごいな。これで舎飼い方式も確立されたな」という印象を受けた。しかし、実際に法人を立ち上げた人に聞くと、その陰で多くの牛が死んだことが分かりました。

コンクリートの床のフリーストール牛舎に初めて牛を連れてくると、元気な牛は滑ってケガをするし、もともと弱い牛はストレスに耐えられずに死んでしまう。結局、そこそこの状態の牛だけ生き残るそうです。また、市場で買ってきた牛の「もくし」（注＝牛や馬などの頭部に装着して行動を制御するための畜産用具）が電動のブラッシング装置に引っかかり、朝行ってみると死んでいたり…。スクレーパーに脚を挟まれて糞尿溜めに落ちて死んでいる――そうした実態を法人の方が赤裸々に話してくれたのです。

とてもショックでしたね。華やかで美しく見える大規模化の陰に、どれだけ牛の死体が積み重なっているのか、と感じました。農家の人が話してくれたから、わたしにも実態が分かった。動物に対する自責の念も込めた話だったのか、あるいは「規模拡大なんて甘くないよ」と言いたかったのかもしれません。農家や牛たちは大規模化を進める酪農政策の犠牲になっているわけで、生産現場をもっと尊重することが必要です。

――テレビなどが大規模牧場ばかり紹介するので、知らない人は「素晴らしいな」と思ってしまう。

吉川　取材の人に汚いところは見せないし語らないけれど、実際に聞くとショッキングな話ですよ。順調に牛が慣れていけば、そこまでひどい状態にならないとは思いますが、産次数の少なさでも明らかなとおり、（寿命を全うさせることなく）多くの乳牛が死んでいるのです。日本では、繁殖障害や乳量・乳質の低下、脚が悪いなどの理由から平均2・5産ほどで淘汰の対象になり、屠殺されて食肉になっています。

草食の牛を豚化する育種より「長生きする牛づくり」が大切

――品種改良という用語をめぐり、「実態は〝改変〟である」という意見もあって、僕は最近、「品種改良（改変）」と書くように心がけています。吉川さんは人工授精をする際、放牧に適したニュージーランド（NZ）の種雄牛の精液を使っているそうですね。そのあたりの狙いをお聞きしたい。

吉川　今のやり方は、ぎりぎりまで穀物を与えても死なない牛を作りだし、草食性の牛を豚化するような改良・改変をしています。一頭あたりの乳量をたくさん出させるために、穀物をどれだけ食い込める牛にするのかということが目標になっている。乳量を増やすことのみを追求する業界の方針を受け、生涯乳量や在群日数、繁殖成績などの面では儲からない改良をしているわけです。

でも、本当に必要なことは、年間1万キロ、2万キロを搾る人にとっての良い牛ではなく、そのあたりの普通の酪農家にとって稼げる牛――つまり、長生きする牛です。ちなみにNZの平均産次数は4・8産。また、標茶町で行なわれた調査の結果によると地域平均は2・8産ですが、同町内の放牧酪農家8戸の平均は3・6産でした。一頭あたりの乳量ではなく、生涯乳量という基準で改良していかなければいけないと思います。

――酪農先進国では、どんな取り

（よしかわ・ゆうじ）1964 年、長野県生まれ。北海道大学を卒業後、道内の有機農家などを訪ね歩き、94 年にニュージーランドに渡る。6 つの牧場で実習生活を送り、160 頭規模の牧場を任された経験も。98 年に帰国し、2001 年に足寄町内で新規入植。現在、放牧と季節繁殖で約 100 頭の乳牛（うち経産牛は半数）を飼う。草地面積は約 90 ヘクタール。牛乳・乳製品の製造や農家民宿も手がける。
※ありがとう牧場：足寄町茂喜登牛 98- 4　☎ 01562-6-2082　https://arifarm.net/

▲「ありがとう牧場」では冬場も牛たちを閉じ込めることはしない。屋外で乾草を食べ健康的だ

◀夏の夕刻、牧道を歩いて搾乳施設に向かう牛たち

組みがありますか。

吉川　オランダの種雄牛は、平均産次数を5産にすることを目標に生涯成績を評価しています。イスラエルでは、熱帯に棲息する牛を交雑させて暑さに強い牛を作り、1万キロ搾っているそうです。日本でも酪農家が儲かる牛を一番に評価しなければなりません。従来のようなホルスタインの純血種による品種改良を続けていくと、地球温暖化が進むなかで「それではクーラー牛舎にします」という話になってしまう。

――僕は、涼しい北海道や東北以外はホルスタイン中心の飼い方をやめるほうがいいと思う。

吉川　南方系の血を入れて、虫や暑さに強く当たり前に放牧できるような牛にしていけば、本州でも放牧することが出来るでしょう。そうなると、牛舎にクーラーは必要ない。北海道から沖縄までホルスタイン一色というのが間違いの元です。

――多様性が必要でしょうね。

吉川　ホルスタインのみだと1頭あたり乳量は出るのかもしれませんが、農家が儲かるかどうかは別の話ですからね。北海道でも、雑種強勢を活用することで酪農家は5年もしないうちに儲かると思います。優秀なジャージーやブラウンスイスの血をホルスタインと交配するわけです。道東あさひ農協の組合長も同様のことを書いており、「これは影響力があるな」と思って記事を読みました(笑)。こちらはホルスタインにフランスのモンベリアードという品種を交配させると聞いています。

日本では、ホルスタインでないと共通の基盤で評価されません。一方、NZでは小さな体で同じ乳量を出す牛のほうが評価が高く、雑種であろうと統一して体重で評価される。(NZの)市場に行くと、牛の遺伝子評価で値段が決まるけれど、日本では家畜商が決めるのでホルスタイン以外は売りにくい。でも、ホルスタインと雑種を共通の基盤で評価し、それが市場の評価に反映されると“雑種天国”になります。

就農から数年後、「放牧サミット」の参加者に牧場を案内する吉川さん(2003年秋)

「放牧学校」創って人材育成へ 多くの人が放牧酪農に転換を

――足寄に就農されて20年ほど経ちましたが、これからの時代を見すえ、どんな営農スタイルを創り、牛とどう付き合っていくのか、吉川さんの考えをお聞きしたい。

吉川　人を育てるのは一番大切な仕事ですから、今後も研修生の受け入れを続けます。就農した時には、機械が入らないところは耕作放棄地でしたが、牛を放牧すると元の緑の牧場に戻っていった。だから冗談で、「俺は耕作放棄地の請負人だ」と言っています(笑)。わたしがいなくなると、放牧を知らない人はこの牧場をやっていけません。放牧のプロフェッショナルを育てていかないと耕作放棄地に戻ってしまうわけです。そこで、(放牧のプロを育てる)「放牧学校」みたいなものが出来たらいいな、と思います。

わたしは元々、親牛30頭、草地面積30ヘクタールの規模で十分だと考えていましたが、たまたま大きな牧場が当たった。めぐり合わせですね。これまでに、毎年一人ずつ研修生を受け入れ、少なくても20人の新規就農者を育てました。今後はボランティアで人を育てたいですね。

――「放牧学校」は足寄らしい、とてもいい構想と思います。

吉川　昨年から町の農業委員をやっていて、農地パトロールに行くと耕作放棄地を目にします。すごく勿体ないし、放牧できる土地は宝の山ですよね。これだけ高い乳価の下、牧柵を張って牛を放したら、どれだけお金を生み出すことか…。上手に経営すると、30ヘクタールの草地で30頭の牛を飼うと乳代だけで2千万円になり、毎年9百万円ほどの純利益を生み出すわけです。

――志を持つ人が就農しやすいシステムを地域で創らないといけない。ところが農協や行政に任せておくと、どうしても拡大路線に走ってしまう。

吉川　ゼロから牧場を立ち上げられるのは能力のある人だから、牧道と牧柵、搾乳施設くらいは周囲がお膳立てして、そこに「放牧学校」の卒業生を入れてあげると、あちこちでお金を生み出します。そうしたことが出来るようにするのが夢です。

もう少し大きな夢は、一軒でも多く放牧酪農に転換していくことです。放牧酪農に魅せられた人が集まってきて、農村は活気づきます。農村の子供たちも、ここの魅力を発見できる。そうしたなかで、都会の人にとっても魅力的な農村文化を発信できたらいいな、と思います。

――豊かな人生経験を持つ吉川さんだから、それは可能ですよ。

吉川　3年前、うちの牧場の生乳を使用している「しあわせチーズ工房」の本間幸雄君と一緒にフランスとスイスに行きました。向こうの酪農家は、平均面積30ヘクタール、26頭ほどの搾乳ですが、住宅が思い切り立派でしたね。省力化のためにお金を使い、自動で乾草を配る機械を導入したり、納屋に運んだ牧草を温風で乾燥させていました。

乳価が安く地形も急で努力している地域でしたが、これは理想的な酪農の姿ですよね。北海道では鉄道を目の敵にして廃線にしていますが、スイスの山岳鉄道は「なんでこんなところを…」と思うようなところを走っている。スイスを真似て小規模化していくと、鉄道に魅力を感じる観光客が訪れるようになります。

牛との緊張関係を持って働き 消費者の応援で業界は変わる

――今後の牛との付き合い方は？

吉川　うちの場合は、人間が1メートルの距離まで近寄ったら牛が逃げるという、ベタベタしない関係が目標です。「可愛い」と言ってブラッシングをするのもいいけれど、わたしは「牛は牛、人は人」で1メートルの緊張関係を持ちたい。朝晩牛を扱っているので、いくらでも仲良くはなれますが、365日放しているから、牛を追えたほうが楽なんですよ。アニマルウェルフェアと逆行する関係かもしれませんが…。

「ありがとう牧場」の牛たちは冬場に集中して分娩する。生まれたばかりの子牛は母親に舐めてもらう

――アニマルウェルフェアは牛をただ可愛がるものとは違って、牛の習性や生態、生理をきちんと理解し、それを踏まえた接し方をすることが基本です。他の動物でも同じことがいえると思います。

吉川　「ありがとう牧場」では、より野生としての牛を尊重したい。ベタベタした関係じゃなく、牛自身の力を引き出すというか…。死にそうな時に人間頼りの牛は死んでしまいますが、人が近づくと力を振り絞って立ち上がろうとする、気力を持った牛は長生きしますよ。

――酪農現場の何を消費者に考えてほしいか、忌憚のないご意見を。

吉川　現場の実態をよく知ってほしいですね。よつ葉牛乳の共同購入グループは長い時間をかけて『放牧牛乳』を実現しました。わたしは数年前から『ありがとう牛乳』の製造・販売をしています。この業界で放牧の話をしても無視されるだけですが、消費者から「放牧の牛乳を飲みたい」と声を上げてもらえれば、酪農業界は変われるんじゃないかと思い、牛乳の製造を始めたわけです。今は、牛乳やアイスクリームのソフトミックスを作り、6月には初めてバターの試作品も出来ました。

――今後が楽しみですね。

吉川　環境にも良く、農家は儲かるし、牛乳・乳製品に含まれる放牧した牛の乳脂肪分と穀物のそれは機能成分の性質が違うので、消費者は健康になれます。放牧をせず嘘のパッケージで売るのは間違っています。現状を知って「放牧の牛乳を飲みたい」と声を上げてほしい。外国から穀物を買ってきて酪農をやることが諸悪の根源です。消費者の皆さんは、「放牧酪農を進めると脱炭素社会、地域循環を実現できる」という視点で応援してください。

――ありがとうございました。

本間幸雄さん経営の「しあわせチーズ工房」では、「ありがとう牧場」の生乳を使ってチーズを製造する

※筆者のＨＰ「滝川康治の見聞録」https://takikawa-essay.com/ に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。